

# はじめの一步

## 障害のある人を理解する



### 第2回 小さな気づき、発見を積み重ねて



全障研埼玉支部

#### 細野浩一

ほその こういち / 1954年生まれ。養護学校、ろう学校で18年間勤めた後、ろう重複障害者の共同作業所を立ち上げる。それ以降30年近く、成人期の障害のある人の福祉に携わる



#### 存在に気づいてもらう

20代の最後から30代にかけて、11年間ろう学校で重複児教育に携わりました。聞こえない障害に加えて知的障害などの重複障害をもつ子どもたちを前にして、子どもたちの発するサインもわからなければ、伝えることもできない状況からのスタートでした。

最初の年、幼稚園で重度知的障害の自閉スペクトラム症のりょうちゃんを担任しました。まだ転校して半年足らずだったりりょうちゃんはとても多動で、学校に来ると園庭のブランコに乗るのをせがんだり、好きな動物写真の図鑑やカタログのある理科室や事務室に入り込んで、好きなページを開いて手でたたき体を大きくゆするなどして、なかなか教室に戻れない日が続きました。私はりょうちゃんの後を追いつながら、ときどきはちよっかいをだしてみたり、教室に帰るように誘ってみたりしましたが、私のことなど眼中にない様子でした。そこで、少しでも私の存在に気づいてもらおうと、次のようなことをしてみました。

一つは、りょうちゃんはなんでも口にもっていいこうとするので、ただ取り上げ

るのではなく、口にもっていいこうとしたものを「チョウダイ」と両手で動作をつけながら私の口の方に誘導するようにしてみました。そのうちに朝登校してくると、りょうちゃんは自分の口を開けて、

私に口を開けてと要求してくるようになりました。この行為は、その後も長く私とりょうちゃんをつなぐあいさつになりました。文化祭での『三びきのやぎのらがらどん』の劇でも、つり橋に見立てた平均台をわたって、がらがらどん役の私が大きく口を開けると、口元に手をのばしてくれる動きにもつながっていきま

した。もう一つは、りょうちゃんが大好きなブランコに乗った時、まだ自分ではこぐことができないので後ろから押してあげていました。そして、押すのをやめると揺れなくなり、彼は「ぶーっ」と声を出して押してくれとせがんできます。ある日、学校へ来ると一目散に園庭に出てブランコに乗ったものの、私はまだ教室にいました。いつものようにりょうちゃんは「ぶーっ」と言ってせがんでいましたが、だれも押してくれないので、また「ぶーっ」。その様子を見ていた時、りょうちゃんが教室の方へ目をやって、私と

目が合いました。それを機にブランコのところに飛んでいき「ぶらんこ、おすよ」と手話をつけながら押してあげました。

#### 日々のとりくみ、かわりを綴る

日々のとりくみ、かわりの中での新たな発見、気づきを日刊の学級通信にまとめ、親や幼稚園や重複部の先生たちと共有していきました。

4月後半の通信には『おさるさん、こんにちわ！』布絵本おやつをどうぞのタイトルで、「たべものの布絵本をとりますと、布絵本とわたしを交互にみて、新しいページをめくると、みかんが出てきて、また、私をみました。『みかん、ください』と手をだすと、みかんをはずしました。私が食べるまねをして、口を大きくあけると、そのみかんを私の口元にもってきてくれました！』とその時の発見、喜びを綴りました。

1年目の最後の通信には『こんなのカントン、早くねんどちようだい！』のタイトルでこんな記事を書きました。「散歩から帰って、ねんどをみつめて遊び始めました。健康ファイルを保健室にもっていくのを頼むとねんどあそびをいったんやめて、小走りに保健室まで行き、ぼん

とファイル置いて帰ってきて、『ねんどちようだい！』と手をにぎるしぐさ。ねんどを受け取り、ねんどあそびを夢中でしていました。このような場面が常にもてたわけではありません。準備をした教材に見向きもしてくれないことも何回もありました。しかし、うまくいかなかった中にも新たな発見や気づきを見出すようにしてきました。偶然の行為かもしれませんが、この行為を確かなものにしていくにはどうしたらいいのかを探る大事なエピソードだったと思っています。

りょうちゃんはその後、ろう学校での生活や経験を通して、バスタオルを手にもって「プール、行きたい」、手を口元にもっていったり食べ物写真の手差しして「食べたい」などの表現し、自らの要求を伝える姿がみられるようになっていきました。

通信、支援記録、実践記録は、日々のとりくみやかわりを綴ることを通して自分たちの実践やかかわりを振り返り、その子ども・仲間の新たな発見、気づきが端緒となつて、その人のもっている力や可能性を見出し、発達のみちすじを開いていくことにつながるのではないのでしょうか。

#### 今月のはじめの一步 『気づきや発見を積み重ねる』

あなたは日々の記録に仲間（利用者）たちのどんな姿や様子を書いていますか。また、その積み重ねは日々のとりくみや支援にどのようにつながっていくのでしょうか。